

受賞者のご挨拶

株式会社ユーイーアイ  
代表取締役社長 加藤 淳弥 様



このたびは、栄えある中小企業振興表彰を賜り、誠にありがとうございます。日頃、ご支援をいただいております皆様方に、社員を代表して心より御礼申し上げます。

このことを契機に、改めて弊社の事業の立ちを振り返り、来し方行く末を見つめる機会とし、今後のさらなる挑戦への決意を新たにできればと思います。

弊社は、今から48年前に、先代社長である私の母が、弱電部品製造、つまり、ブラウン管テレビ等の家電製品に使用される電子部品製造の分野で創業いたしました。当時は、経済成長率も4%を超え、モノが大量に作られ大量に売れた時代の最中だったこともあり、弱電部品製造の新たな工場をやりたい人を募集しているという情報を聞きつけ、自ら応募し、事業を始めることになったと聞いております。それまで数年間、嫁いだ先で慣れない田んぼの仕事をしていたのですが、一転して工場経営者となった訳です。

先日、その動機を尋ねてみたところ、当時は農作業のほとんどがまだ人力によるもので、それが非常に大変だったため、「何とかしてそこから脱出したい一心だった」と教えてくれました。当時、私は就学前でしたのでおぼろげな記憶ですが、親戚の物置小屋にベルトコンベアが流れていて、それに向かって地域のお母さんたち5、6人が座って何か細かな作業をしている光景が目に見えます。十分とは言えない環境の中、全てが新たな取組みで大変だったと思われませんが、

談笑しながら絶えず手を動かして働く皆さんの姿には活気があり、明るい空気感や景色だけが、遠く時を隔てた私の記憶に今も残っているのは不思議な感覚です。私の原風景の一つのようにも思われます。

そこから10数年の間に、近隣の町を含め3拠点で製造する等、事業は拡大していきましたが、年号が昭和から平成に変わる頃に、発注元が生産拠点を中国へ移すと方針転換し、弊社もそれまでの仕事を失うこととなりました。廃業か、あるいは別事業を始めるかの岐路に立った際、先代社長が下した決断は、新たな事業となる「靴づくり」に参入するということでした。このときも、全く経験もない中での決断だったようですが、「自分たちの手で靴をつくれるなんて面白そう、これならば続けられる！」と思ったことと、靴づくりは非常に手間のかかる仕事ですので、それによって社員の雇用継続が図れると考えたそうです。その後、弱電部品製造の工場を順次計画的に閉じていき、業態転換していきました。これが第2の創業でした。

創業当初及び業態転換の際の、変わることを恐れず未知の世界へ希望を持って向かう「明るい勇気」、不透明な状況を突破する「行動力」、そして、先行する同業の諸先輩等から本当に多くのことを教えていただいたようですが、そうした新たな知識、知恵に「素直に向き合い、吸収する貪欲さ」など、私自身も社員も改めて学ばなければならぬと感じます。

そのように申しますのも、私たち靴製造にかかわる業界は、現在、大きな転換期にあるためです。弊社が本格的に靴づくりに参入した1990年代後半は、少ない品番で十数万足の大量受注をいただいていた時代で、お客様のブランドの商品の製造を担い、納期内に正確に再現することが、私たちに期待された役割でした。団塊の世代の足下を支えた紳士革靴、女性の社会進出の進展と共にあった革製パンプスなどを、まさに一心不乱に作り続けてまいりました。

そして、現在、弊社を含め国内の革靴製造業の事業環境は激変し、とりわけ革靴の大きな受注獲得は困難になっていると感じます。要因は主に2つあり、1つは、長い時間をかけて進んだ装いのカジュアル化・ドレスダウン化が不可逆的に進行していること、もう1つは、社会情勢や為替などの影響により何度も揺り戻しがありながら、低コストで生産できる東南アジア等の海外工場への生産移転が進んできたためであると思います。

こうした時代の大きな流れに抗うことはできませんが、今後、弊社が生き残っていくためには、言い換えると、お客様に価値を提供し続けていくためには、虚心坦懐にユーザーの声に耳を澄まし、国内で製造する私たちだからこそ担える役割を見つけ出し、それを果たしていくことが必要です。

私たちがその1つと考えているのが、このたび新起事業激励賞として評価していただきました、自社ブランドの取り組みです。靴を作るという意味では従来と変わりませんが、OEM製造という「川中」のみでやってきた弊社にとって、自ら企画する「川上」、エンドユーザーと接する「川下」までを自社で行うことは初めてです。文字通り、始まったばかりの弱々しい歩みですが、より能動的、自律的に取り組める、こうした事業の種

を育てていくことによって、数年先の事業の柱へとつなげてまいりたいと考えております。

また、こうした自社ブランド事業で、川上から川下までの一連の流れを経験することで、OEMのお客様とともにエンドユーザーのお客様へ責任を負っていることを、これまで以上に実感することにもつながっていると感じます。

OEM事業と自社ブランド事業は、弊社にとっては車の両輪のように、両方なくてはならないものです。現在はOEMの車輪が大きく、自社ブランドのそれはまだ補助輪のようなものですが、徐々に輪を大きくし、互いに支える事業として育ててまいりたいと考えております。

国内靴製造業者にとっては、まさに混迷の時代を迎えています。明るい勇気をもって未知の世界を切り開くべく具体的に行動し、自社に足りないところは素直かつ貪欲に知識や知恵を吸収して、留まることなく足を前に踏み出し続けてまいりたいと思います。私たちは、まだまだ未熟であることを自覚しておりますが、同時に、私たち自身が、自らの未知の可能性に最も期待もしております。

最後になりますが、弊社の事業は、お客様をはじめ、協力工場、サプライヤー、公的支援機関、金融機関など多くの関係者の皆様、そして一丸となって事業を担う社員に支えていただいて成り立っております。皆様の期待に応えられるよう、そして地域の発展に少しでもお役に立てるよう、さらに精進してまいりたいと思います。

本日は、誠にありがとうございました。